

土 淨

1990-1

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可）
昭和二十四年四月二十八日（河橋省特別授受認許）第三二五号
平成元年十二月二十五日印刷
第五十六卷
正月号
平成二年一月一日発行



一月の秀句

読初や露伴全集はや五巻

久保田万太郎

掃初やかゝれとてしも雪もよひ

久保田万太郎

めでたさは初湯まづわきすぎしかな

久保田万太郎



|| 正月号 ||



念仏に於ては、末法の後なお利益
あるべし。

——『念仏大意』

目 次

——新春法話——

中くらの春……………竹 中 信 常……(2)

午 年 史 談……………細 田 隆 善……(9)

<読者の便り>

法然浄土教思想の根本仏教性……………大 橋 賢 一……(19)
——読後感的宗学論の試み——

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <34>

海と山の狭間で……………木 下 隆 一 ……(26)
——我が思い出に住む犬たち(20)——

◇◇長篇連載◇◇

伝弘の生涯(13)……………松 浦 行 真……(34)
——大僧正岩井智海伝——

表紙絵 小林治郎画

(新) (春) (法) (話)

中くらの春



たけ なか しん じょう
竹 中 信 常

(浄土宗総合研究所長
大正大学名誉教授・文博)

一

正月になると、日本人はお互いに、
「あけまして、新年おめでとうございます」

と挨拶する。若い頃は真剣に考えたものである。「おめでたい」というが、何で一体おめでたいのか。新年がおめでたいのか。あけましてからおめでたいのか。考えてみたがよく分

らない。だから、年をとった此頃ではそんなことを考えることはやめにした。みんながそういうのだから、そうなのだろうと思うようになった。

そして、ここ数年、元旦の夜明けと共に明治神宮にお参りすることになっている。これも別に明治天皇を崇拜しているわけではない。ただ、何となく、数万数十万という人の群れにまじって、暁闇の玉砂利を音を立てて歩いているだけである。此頃は若者の姿が多く若い娘さんが正月の晴着をまとい、日本髪などを結っているのが目につくようになった。近來の日本の豊かさを象徴しているのだろう。結構なことである。そして、破魔矢を買ったり、おみくじを引いたりしているのを見ると、彼らもまた、ただ何となくお参りに来て、

何となくおみくじを引いているのだろうと思われる。中には筆者のように、毎年お参りするの、しないと何となく気になるから来たというものも少くないと思う。

お正月をおめでたいというのも、必らずしもみんながみんなそう思っているわけではないらしい。一休禅師の、

正月は冥土の旅の一里塚

めでたくもありめでたくもなし

というほど、皮肉っぽくないにせよ、

めでたさも中くらいなりおらが春

といった一茶の心境である。

「中くらい」ということはどういうことだろうか。近来、日本人の生活意識は「中流意識」だそうだが、中流つまり中産階級は貧乏でもなく、といって金持でもない。まづまづ無事安穩に毎日を送って行くという生活で、中産層が厚いということは、それだけ社会が安定しているということになるから、「めでたい」ことである。だがここでちょっと考えてみねばならぬ。中くらいということは上でもなければ下でもない、ということ、つまり「中ぶらりん」ということにもなりかねない。ひと頃、日本の政治に「中道政治」などということがいわれ、右でもなく、左でもない。保守でもなければ、革新でもない政治を主張

するものがいた。しかし、それは、ウラを返していえば、右でもあり、左でもあるということ。保守でもあれば、革新でもあるということになる。時により、事によってどちらにでもなるというわけである。これでは「中道」ではなくて「御都合主義」であり、「日和見主義」といわざるを得ない。そんな政治がうまくゆくはずはないので、此頃は「中道政治」などというものはいなくなった。当り前である。

では「中くらい」とは「中ぶらりん」の「中途半端」なことか。中国の大聖人で、此頃再評価されるようになった孔子は、

「中庸は徳の至れるものなり」

といっている。仏教の根本思想も「中道」にあるといわれる。本当の「中道」は決して

「中ぶらりん」でも「中途半端」でも「御都合主義」でもないのである。

いささか仏教知識をひけらかすならば、天台では空・仮・中ということをいう。すべては「空」であり、あらゆる事柄は「仮」である。さればといって一切は空であるといつて何もしないのは本当でないし、また「仮」の姿にこだわって右往左往することもよくない。つまり、空にこだわることも、仮に執着することもやめて、空と仮の中道をゆくべきであるというのである。

全く乱暴な言い方だが、空にも仮にも執着しないことである。右だ左だとそれぞれにしがみついてもよくないが、左でもない、右でもないということにこだわることもよくないというわけである。西暦一五〇〇二五〇年

頃に、インドに竜樹という大学者が『中論』という本を書いた。これを元として中観派という学派が生れたのであるが、これが「八不中道」ということを説いた。中道の八つの在り方である。むずかしい仏教用語でなく、ごく常識的なとらえ方をすれば、すべてのものは生ぜず、滅せず、絶えず、続かず、一でなく、多でもなく、過ぎ去ったものでなく、これから来るものでもない。要するに、一つのことにとこだわらず、現実をありのままにみれば、そこに本当のものの姿（実相）があらわれってくるのである。言ってしまうばこれだけのことだが、これがなかなか難しいことで、このことを「不可得の中道」といつているのである。

「中」とはこのように意味深く、とらえに

くいものであるが、あえていうならば、「執着」を離れること、こだわりを捨てることでもある。また孔子の言葉を引用すれだ、『論語』に「過ぎたるは及ばざるが如し」とある。完全すぎれば逆に不完全になるというのである。正月も、めでたすぎると反ってめでたくなるだろう。こういう話がある。

紅葉の散り敷いた庭前を一人の禅僧が箒で掃いていた。やがて落葉を一つ残らず掃き清めると、つと樹の幹を軽くゆすった。枝に残っていた葉が二、三枚ハラハラと地面に散った。禅僧は縁に腰をおろして、ちっとその風情を楽しんでいた。いま掃いて塵一つ止めぬ地上に散った紅葉は、一きわ鮮かにみえたのである。完全は不完全であり、不完全は完全なのである。論語のコトバそのものである。

三

ある人が法然上人に訊ねた。

「酒のむは罪にて候か」

上人は、

「まことにはのむべくもなければ、この世のならい」

本当は飲むべきではないが、世間一般の人が飲んでゐるから、ほどほどに飲むならいいでしょう。酒の好きな筆者にはまことに都合のいい回答だが、とにかく、飲むにせよ、飲まぬにせよ、そのことにこだわってはいけないという答えである。

また、ある人が訊ねた。

「念仏をしていて眠くなったら、どうしたらいいでしょう」

「目のさめたらんほどに……」

と答えられた。念仏していて眠くなったら居眠りしてもかまわない。そして、目がさめたら念仏を続けなさい、というのである。これもまた、念仏に余りこだわって、眠いのを我慢することはない。眠かったら眠るがいい。さめたらしなさい。要するに、念仏すること、は大切なことだが、余りこれに執着すると、念仏のための念仏になってしまって、肝心の往生浄土はどこかに飛んで行ってしまふからである。

法然上人ご自身は仏教の正統の戒律の系統を継いでおられ、一生涯妻帯されなかつたが、お弟子例えば親鸞聖人が妻帯するのを許されており、こうも仰言っている。

「ひじりにて申されずば在家になりて申す

べし。在家にて申されずば遁世して申すべし」

出家しても念仏できなければ、家族と一緒にいて申すべし。家について申せなければ、ひとりになって申すべし。

ご自分に対しては非常にきびしい態度をとられたが、他人に対しては、その人に応じた生き方を許されたのである。このような法然上人の性格を、「内剛外柔」——内(自分)に対してはきびしく、外(他人)に対してはやさしい方であつたといわれる。

われわれも、法然上人に教えられて、余りものごとくにこだわらず、自然のままに生きるべきであり、お正月も、余りめでたがらず、ほどほどにめでたがって暮したいものである。

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の實踐をしまいにしました。現在、『浄土』誌は五十五巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一歩一歩前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

午年史談



細田隆善
ほそ だ りゅう ぜん

平成二年は干支えとの上から庚午かのとうまであるので、午年といい午は十二支にあてると動物の馬であります。午は時間の上から正午をさし、また午前十一時から午後一時までの二時間をいい、古来これを九つといいました。方角の上から午は南をさします。本年は西暦一九九〇

年、仏誕暦では二五五六年、あと十年で二十世紀になり、昭和以来六十五年、大正以来七十九年、明治以来百二十二年目になります。旧暦では午は五月のこと、そのため午日は旧暦五月五日の端午たんごをいいます。

馬の文字は馬の形からの象形文字の変化し

たものです。馬は奇蹄目ウマ科に属しその祖先と種類は多く、日本語のウマは蒙古語のモリンに由来するといわれ、わが国には野生の馬もいたが大陸から渡来しました。馬の家畜化は石器時代から行われ、近年発掘された奈



——ペガサス（白い翼をもった牡馬）——

良法隆寺近くの藤ノ木古墳には貴重な馬具が発見されました。千四百年前のものですが精巧な馬具であることを拝見しました。とくに驚いたのは鞍のバルメット文様でした。バルメットはギリシャに発達した文様ですが、その起原は古代エジプトに発生した植物性文様です。このバルメットがブドウ文様を取り入れ、インド、中国の仏教美術となり、その文様を美しくしました。

わが国は古代から馬がいて耕作、乗馬などの人類生活に役立ち、埴輪にも作られました。日本書紀によると奈良天武天皇（六七—六八六）のとき、新羅から犬、駱駝などが献上されたとあり、その後も新羅、渤海、唐から馬が献上されたことが記されていることから、良馬はしばしば大陸から輸入されました。

わが国では馬は神事に使われ、古来競馬は神事として開催されてきました。続日本紀によると「群臣五位以上をして競馬を出さしめ天皇降臨し給へり」とあります。その後、きそい馬、くらべ馬、駒くらべなどといひ宮中



——木曾馬のワラ玩具——

の儀式になりました。京都加茂神社では競馬が武技として始まり、流鏑馬やぶきまは全国の神社にひろまり、鎌倉時代になると馬は重要な軍馬となりました。関東東北が軍馬の産地として活用されるようになりました。飾馬かざりうまは加茂神社からです。

馬は古代から人間生活に関係が深く、馬は万葉集（八世紀）に数多く詠まれています、その一首。

○馬ないたく打ちてな行きそ日並なべて見ても
我が行く志賀あらなくに（刑部乗麿呂）

俳句には馬に因む季題も多く、芭蕉の「おくのほそ道」に、

○野を横に馬索うまづなむけよほととぎす（芭蕉）

「野ざらし紀行」に、

○道のべの木槿きざきは馬にくはれけり（芭蕉）

馬頭觀世音菩薩（丹後松尾寺本尊、京都府舞鶴市）



などがあります。

宝町時代なると騎馬の余技として曲馬きまがありました。江戸時代になると曲馬は一層さか
んになり、馬上で軽業、早や変り、芝居の所
作事まで演ずるようになりました。明治時代
になると西洋曲馬が入り、しだいに変遷して
サーカスとなりました。

馬は生活に直接しているため、馬の郷土玩
具も多く、とくに昔からわらで作った玩具が
多いのです。東京深大寺の赤駒、岩手県花巻
の忍び馬これは縁結びの馬として知られてい
ます。山口県下関の盗餅とへの馬、長野県
桐原のわら馬、千葉県柏のわら馬、福島県芦
屋の八朔馬はっしやくま、なかでも木曽のわら馬は有名で
す。これは胴に布を巻き赤い腹帯を締め木曽
路の難所で旅人の足となることを表し、木曽

馬の雄々しさ美しさを表わしています。青森
県八戸市の八幡馬は、仙台市の木下駒と福島
県の三春駒とともに日本三駒として有名であ
ります。青森市の一刀彫南部馬は写実的な馬
の玩具、岩手県盛岡と花巻のチャグチャグ馬
も有名です。また宮崎県のシャンシャン馬、
長崎の猿乗り馬、三重県多度の檜馬ひのきうま、岐阜県
中津川市の春駒などが有名です。

午年生れの人の生涯の守り本尊は勢至菩薩
です。また薬師仏十二神将のうち、珊底羅大
将は頭上に馬をいただく午の神、赤色の忿怒
相あむをしています。古代インドでペードゥ王が
シバ神から駿馬バーイドバをもらい、羊蛇を
退治して戦勝した話がインドで有名となり舞
楽ともなり、仏教にとり入れられ、わが国に
も伝来しました。この駿馬が馬頭観音の姿と



西國九番丹後松尾寺

——わが国最古の一つである馬頭観音像

(京都府舞鶴市松尾寺) ——



——馬頭観音を本尊とする駒形堂（東京・台東区駒形橋詰）——

なりました。菩薩の中で忿怒相の姿は馬頭観音だけです。

路傍でよく見かける碑に馬頭観音と文字だけの碑をよく見かけます。馬の安全と供養を願ったもので本来は三面六臂または八臂の忿怒相をした馬頭観世音菩薩像の碑です。福岡県の観世音寺の本尊は一丈六尺、天に逆立つ怒髪（どはつ）の物凄（ものすご）さと牙の鋭さは異形の姿、重文です。京都府舞鶴市の松尾寺の馬頭観音も古来有名です。古代インドの悪蛇退治の駿馬が仏教において、人々を救う仏の慈悲心を象徴して忿怒相となったものです。

松尾寺の馬頭観音には由来があります。近くに鴻の浦（こうのうら）という漁場があり、土地の結城宗太夫（むすねのむすめ）は常に一寸八分の馬頭観音像を身につけていました。この漁場の漁士が十七隻の舟を

組んで沖に出たとき、台風に襲われ全員が溺死しました。妻子たちが百ヶ日忌の供養をしているとき宗太夫だけが一人帰ってきました。宗太夫の話によると遭難して吹き流されているとき鬼女に捕らわれようにしました。このとき白馬に乗った観音さまが表われ、早く馬



—— 巨大な馬頭観音石碑（東京・江東区南砂） ——

に乗れといわれ、馬に乗ると馬は空を飛び鴻の浦に落してくれて命が助かったといいました。その馬がたちまち一本の浮木となっていたので、宗太夫は観音の化身としてその浮木で馬頭観音の像を彫り刻み安置しました。この話が天皇に達し、一条天皇（九八六—一〇一



—— 馬頭観音石仏（東京・江東区立第二中学校） ——

○の勅命により松尾寺が創建され、その後もその功德により難風を防ぐご利益をうけたといわれています。

隅田川の駒形橋近くの駒形堂の本尊は馬頭観世音、昔はこの付近は奥州街道の馬道うまみちといわれ馬の往来が多く、その安全を願うために安置されたものです。

江東区南砂一丁目に高さ四メートルの巨大な馬頭観音石碑が昭和二十八年建立されました。東京府においてこの付近はもともと馬の多いところ、材木などの搬送はみな荷馬車でした。昭和二年東京府に馬は八二〇匹、この付近一帯には二〇八六匹いました。戦時中供出された馬の供養のために建立された碑です。

江東区深川二丁目の区立深川二中の校庭に

馬頭観音の石仏があります。公立学校の校内に石仏が安置されているのはこの一校だけです。この碑は二人の学童が荷馬車の馬にはねられて死亡したため、その供養と学童を荷馬車から守護するために建立されたものです。

ギリシヤ神話には上部が人間で下部が馬であるケンタウルスがあります。これは昔スキタイ人が馬に乗って風のように現れて略奪し風のように消えていくのを、乗馬術を知らないギリシヤ人は恐れたものです。またギリシヤ神話では翼のある天馬てんばをベガサスといいます。主人が天に昇るときベガサスは投げ落とし、飛翔をつづけ、星になったといわれています。午年は奔馬跳躍の躍進繁栄の年といわれています。是非そのようにあってほしいものです。(なお、カットは馬の象形文字「鄧石如」)

◇◇◇好評増刷◇◇◇

寺内大吉のライフワーク

寺内大吉 著

『立ち止まるな善導』

歴史像でとらえた念仏者・善導!!

法然「偏に善導一師に依る」、親鸞「善導独り仏の正意を明かせり」。日本浄土教に決定的影響を与えた中国唐代の念仏僧と時代背景を描く——好評の本誌連載の長編!!

A5変型 四七四ページ 定価一八〇〇円

《発行・発売》

毎日新聞社

〒一〇〇―五一 東京都千代田区一ツ橋一―一―

TEL (〇三) 二二一〇三二

《読者の便り》

法然浄土思想の根本仏教性

―読後感的宗学論の試み―



大^{おお}
橋^{はし}
賢^{けん}
一^{いち}

最近、藤本浄彦氏の『法然浄土教思想論

攷』という一書を買って求めた。以前より、氏の取り出される着眼や視点が、私のそれと似ているように思って、何となく関心を寄せて

いたのである。

私は、由来、法然上人の發揮の思想として、根本釈尊の縁起・相依性になっっている。そのところと置きたいと思っているものだ。

だから、藤本論文の読後感という形で、兼ねて私の所信をも述べてみたい。

今、この本に収録されている諸論文の中から、「法然における浄土教的存在論の考察——法然浄土教と現代をめぐる論考——」を、任意に取り上げることとする。任意に言ったが、先にページを繰っていると、「法然浄土教における存在論の地平——『選択本願念仏集』を中心に——」という章名が目にとまったからでもある。すなわち、これも私の年来の主義なのだが、法然上人の思想を語るのに、やはり上人の名著『選択集』に、全面的に依拠すべきではないか、と思うのだ。これはまづ当然なことと思うのに、現実にはそう簡単に結びついていけない——と私には思える。その一例をあげるなら、『選択集』は公式

の見解を述べているものであって、念仏者のあり方、などという具体的なすがたは、上人遺文として残されている法語や書簡にこそ示されている、というような考え方である。これも一面においては同感なのであるが、しかし、この見方だと、どうしても、公式の見解は抽象的観念的なもので、生き生きとした上人の心が通っていない、という風に、消極的な視点の方が前面に出てくると思う。それでは、法然上人の思想が、その名著『選択集』に全現されていない、というような具合になるから、法然上人の精神的評価など、得られない筈もないのである。しかし、浄土宗門人として、上人の思想の積極的評価ができないとすれば、やはり非常にさびしい事態といわざるを得まい。私は上人の教えのすべてを、

上人の主著『選択集』に求めようと思つてゐるものだ。

さて、藤本論文の序論、西谷啓治氏の文を引いた後で、「われわれは、この文脈の示唆する『宗教自身が新しい地平を開くというところ』の必然性を常に課題としなければならぬ」と書いておられるが、マルクス主義等、従来の宗教の視野に上らなかつた新しい思想が出てきた近代にあつては、確かにそれらに対応した形をとらねばならない点はあるが、それがどの程度までなのか明らかでない。つまり、今、そこで述べられている宗教を仏教と限ってみれば、仏教とは覚者の教えであるゆえ、およそ仏教の名を冠しているものは、全て自覚を経たものである、と見ることができよう。そうなれば、それぞれの時

代に著わされた論書には、それぞれの時代に生きた仏教者が把えた、その時々の実際の人間の姿が示されているのである。もちろん、その人間の姿は、仏教の開祖である釈尊が把えたように見るべきことに当然である。後、その見方は、諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三法印として規定されたが、確かに釈尊の意になつてゐる、と思われる。なぜなら、現実の、頼るに足らざる無常の姿は、絶対的な常一・主宰の我のないことを示すゆえ、その実相に迫るには、無我なるべき修行を要すると同時に、相対的原理、すなわち縁起・相依性に則つた、多元的で、まさに総体的な目配りをするることによつて、涅槃、寂靜、安穩な世界が現出する、ということなのである。ゆえに三法印は、まさに仏教の旗印、なのであ

る。そして、その旗印を掲げて、自覚的に涅槃の理想に向かって精進を続けるべき、行為的教法が仏教であるといえよう。自覚ゆえ、現実の自己と、それをとりまく社会への視点もなしとしない。もちろん、現実の自己の奥底に、無我なる存在のあり方を示す存在論でもある。そうすれば、藤本氏が続けて引用される西谷論文も、仏教にとっては、いわずもがなの当然事ではなからうか。

「その最も足下にある視座は、人間の本质という問題には、人間とは何であるかという問題と、人間は如何に生きるべきであるかという問題とが、一つに結びついている……」
言わば、「存在論」の問題が浮上してくるのである。そして、より具体的には、「歴史的——社会的な現実の境位に於ける、然もその現実

の時間性に徹した如き実存が、何処まで捉えられているのか。……と問われ断じられる」

現代の実存思想と、伝統的仏教の対決の必要性はわかるとして、本来の仏教に、いわゆる実存的現実存在性の考察がある点を、藤本氏はどう考えておられるのかな、と思ったのであった。そういう仏教を、全面的に新しいものに変えてしまえば、その含まれている実存性はどうなってしまうのかな、という意味で、「どの程度まで新しくするのか」という疑問を呈したわけであった。

現代において仏教は何を教えるか、と問うよりも、仏教に現代のあり方を問うほうが、より仏教徒らしい態度である、と教わったことがあるが、仏教の自覚教であることを想起すれば、何となく頷かれもするのである。

次に、第二章「1人間実存の浄土教的契機

——善導と法然——」として、浄土教における実存性の考察となる。そしてそれは、浄土教以外の諸門諸教（いわゆる聖道教）の哲学的観念的傾向、従って実態としては、仏教本来の否定精神（無我）が観念化されているから、いきおい、現実そのままを肯定するほうに解消されてしまい、活力を失ってしまう傾向を批判して興ったのが浄土教であるという、教理史的背景を思い出さしめる。ゆえに、浄土教と実存性の関連の深さは、「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來^{よしか}た常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」という善導『観經疏』の有名な文言を示せば足りるのであろう。少し付言すれば、聖道諸教の観念化を批判して、現実汚濁の実態を見よ、と迫

る浄土教が、却って、厭離穢土という形で現実否定性を有して、仏教本来の否定精神を堅持し得ている点、仏意・冥慮の働きの絶妙を思うものである。

ところで、ここで問題を感じた箇所を挙げてみよう。「2法然における浄土教的実存——

「機縁」的実存——」のはじめ、「善導にとつて、△罪惡生死の凡夫▽△常没常流転▽なる実存は末法の危機的自覚を主軸的契機としている。……一方、法然においては全く異なる。すなわち△三学非器▽の凡夫であるゆえに、その凡夫は旧来的な仏教の器として在るのではない。……この箇所の「法然においては全く異なる。」という表現に、副詞使用の疑問を持ったのである。つまりこういうことだ。善導にありとする末法の危機的自覚は、法然の主著

『選択集』第一章に「当今は末法、現にこれ五濁惡世なり」という道綽の文を引用し、又、第八章で前引『觀經疏』の文を引用して現実の罪惡相を述べていることで、法然は全く善導を継いでいるのである。さらに「三学非器」ということで、戒・定・慧三学に依る旧来の仏教伝統を全く離れている、と言うのならば、藤本氏自身、後述の部分で「法然はその深淵に立つゆえに、自らの出会いをすべて『機縁』の内にとらえるが、まさにそこに大乘仏教の基盤たる縁起思想への連なりも伺いうる」と述べて、全く離れているとする旧来の伝統と関連していると、いわば矛盾する視点を示したことになると思うのだが、どうであろうか。

しかしながら、法然教には、實際、一見矛

盾する二つの見方が含まれている、と私は言おうと思う。そしてそこでは、矛盾は何ら矛盾ではないのである。二つの見方が静かに共存しているのみである。すなわち、聖道——ことに大乘教の現実肯定性——批判と、聖道の存在を、それでも認めざるを得ぬ現実性。前者は『選択集』第一章中、「聖道門の大意は、……この娑婆世界の中に於て……四乗の果を得るなり。……」の文で明らか。後者は、同第四章、「次に異類の助成とは……菩提心を発する等とは、これ助行なり」として、聖道門の心まで浄土門に組み入れている所、聖道完全否定ではないことを知るべきであろう。すなわち、法然教においては、絶対的否定はない、と言わねばならない。聖道諸教との差異は、ゆえに、相対的差異なのである。これ、

まさに、根本釈尊、縁起・相依性の体现でなく何であらうか。

また、藤本氏の言う「機縁」の実存ということも、単に、縁という存在のあり方（有縁）とするよりも、有縁のものもあれば、無縁のものもある、という、多面相對の姿として受容しようと思う。そうすることによって、その話の頻出する第八章、「諸仏の教行、数塵沙にこえ、機縁随情一にあらず。たとへば……明よく暗を破し、空よく有を含じ、地よく載養し、水よく生聞し……」と、現実の多面性を素直に認めている善導文引用の意味も察せられるのであった。

私はかねてより、この第八章を、縁起・相依性の原理顯開の章に擬し、重んじてきたのである。さらに付け加えれば、後章で藤本氏

が使われる「ダイナミズム」語は、この相對性Ⅱ総体性認容としての、広大な視点にこそ付せられるべきでないか、と思うものだ。その辺の消息を示すのが「待対」語であろう、と思うものだ。この、縁を待つ、悠容たる心境を見よ、と言いたい気がするのである。

——付——

大乘批判といえ、袴谷憲昭氏『本覺思想批判』が、安易な肯定性を剔抉して、なかなか快いものだが、既にして法然教に、袴谷氏の認められる道元教をも含んだ形で、聖道門の即身（心）成仏的肯定性への批判が確實になされていたことを、ここに強調しておきたい。

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(20)—

木の
下
隆
一

熱海を過ぎた辺りから車内の混雑も幾分緩和され、デッキの左右の窓から人の肩越しに外を覗けるようになった。

「あれが初島か。源実朝がへ箱根路を我れ越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ」と詠んだ島はこれか。それにしても青い海だな、相模湾なんて言ってるが、これは歴

とした太平洋だもんな」

と、見慣れた瀬戸内の海の色より深い藍色に感心したり、大船では、

「これが空襲に來た B 29 が、東京・京浜方面に向かう転舵目標にした大船観音か」

と汚れた立像を眺めて、或る種の感慨に耽ったりした。B 29 が目標にしたかどうか定かでないが、戦争中からそんな噂は耳にしていた。軍部もそれを危惧して迷彩を施したらしく、その残滓が戦後五年近く経つというのに、観音像を見るも無惨な姿にしていた。観音様も戦争の被害者だったのだ。

この辺りまでは青空が見えていたのに、東京に近づくにつれて空はだんだん黒くなっていった。ぼや々と空を見ているうちに、私はふと高村光太郎の「あどけない話」という詩を思い出した。

〈智恵子は東京に空が無いといふ。／ほんとの空が見たいといふ。／……〉

この詩が作られた昭和の初め、東京の空はすでにこんな色をしていたのであろうか。人は狂っていると憐愍の情をもって智恵子を見たが、高村智恵子は狂ってなんかいなかったのだ。人より少しだけ感性が豊かで鋭かった。彼女はその鋭さを韜晦するために、狂人を演じていただけなのだ。

〈智恵子は遠くを見ながら言ふ。／阿多多羅山の山の上に／毎日出てゐる青い空が／智

恵子のほんとの空だといふ。／＼あどけない空の話である。＼

光太郎さん、「あどけない話」とあなたは軽く逃げているが、本当は彼女が狂人を装っていることを知っていたのではないか……。

この時、私の胸の中を去来した思いは、かなり焼けっぱちなものであった。多摩川の鉄橋を渡る轟音が膝に響くと、私は思わずへたり込んでしまった。立ってられないほど疲れきっていたのである。そして、無性に水が飲みたかった。

東京駅には父が迎えに来てくれていた。会っても二人の間に言葉はなく、目でお互いの存在を確認し合っただけであった。それだけで充分だった。父にうながされるままに電車に乗り、最初に駒場へ東大の一次発表を見に行ったが、車中でも殆ど口を利くことはなかった。渋谷へ着くまでの間に交わした会話でいまでも覚えているのは、私が、

「人が多いね」

と言うと、

「いつもこんなもんだ」

と、父は答えた。そして私が返事をしないしていると、父は話の接ぎ穂を失って黙ってしまった。電車が目黒を出てしばらくして、

「乗る電車、乗り換える駅、道順はしっかり覚えておけよ」

と、父は思い出したように言った。たったそれだけである。

渋谷駅のホームに降り立つと、父は、

「ここで井の頭線に乗り換える。そして二つ目が駒場だ」

と私の顔を見て、行け！と言わんばかりに顎をしゃくった。父は実地訓練を始めるつもりだった。井の頭線に出る通路は迷路のようで多少まごついたが、案内標示板の矢印に従って行けば、案ずるほどのことはなかった。井の頭線のホームは同じ年格好の少年で溢れていた。こいつらみんな東大の発表を見に行くのかと思うと、私はうんざりした。何となく重苦しい空気がホーム全体を支配していた。そんな空気を引き裂くように、声高なお喋りが起こり、続いてどつと笑声が湧いた。話ぶりとどことなくスマートな身のこなしで都会育ちの少年たちであることはすぐに分かった。彼等はごく普通に振る舞っていたのであるが、田舎者の目には、それは傍若無人の所業に映った。彼等は慣れているから、電車に乗るのも素早かった。それがまた癩の種となり、頭越しに交わす早口の会話も気に食わなかった。私はコンプレックスの塊になっていたのである。しかし、そのうちに妙なことに気がついた。彼等は「それでヨオ」「それでサア」と言葉の端々にやたら間投詞めいた「ヨ」や「サ」をつけるのである。田舎者の私が聞いてもそれはいかにも下品で泥臭かった。「何だ、こいつら東京の田舎もんじゃないか」と思うと、私の劣等感は一遍に消滅

した。

当時の駒場の駅は無人駅だったように思う。吹曝しのホームからばら線路に飛び降りると、向こうの土堤を目ざして少年等は走った。土堤を越えた所に、合格発表の掲示板が立てられていたからである。「多分駄目だと思うよ」と予防線を張っておいて私も飛び降りたが、走ることはしなかった。足が棒のように強ばって言うことを聞かなかったせいもあるが、

「所詮駄目なものは駄目なんだ。走ってどうする、よせよせ悪あがきは……」

と、もう一人の私が耳許でささやき続けていたのである。

「山田さんに無駄骨折らせたかな」

「結果的にはな。帰ったらよく謝るんだな」

「まだそうと決まった訳じゃないぞ」

「いや、そうに決まっとる！」

もう一人の私はなかなかしぶとかった。山田さんというのは三年の時の担任で、

「東大を受けます。内申書お願いします」

と頼みに行くと、山田さんは呆れた。

「本気か、お前」

「本気です。同じ落ちるなら、他の大学より東大の方が」

「格好いいか」

「まあ、そういうことです」

「お父さんの任地が東京ということだし、……トライするのも悪くないか」

「よろしく願います」

「しかしなあ……。東大が内申を重視するとは思わんが、進適の成績は一応の目安として考えるだろうな。問題は、東大がどこにボーダーラインを引くかだ。よしんば半分のところで引いたとしても、お前の成績はその半分にも達していないのだから、苦しいぞ」

「一点足りないだけじゃないですか」

「その一点が重いのだ。でもな、折角お前が受験しようというのに、やめろとは言えんわな。書いておくから明日取りに来い」

「有難うございます」

翌日、封をして渡された内申書に、何と書かれていたか私は知らない。

あまり期待せずに掲示板の前に立つと、何と私の受験番号があったのである。二度、三度見直してみても、それは忽然と消え去ることはなかった。奇蹟としか言いようがなかった。

「手続きをせんといかんな」

いつの間にか、父が後ろに立っていた。その声を聞いた途端、私は気が抜けてしまった。やったという思いよりも、山田さんに対して面目が立ったと、ほっとした気分だった。「先生、有難う」そう思うと、急に提げていたボストンバックが肩にずしりと重みを加えた。

手続きを終え、再び渋谷に出た。

「ハチ公の銅像があるのはここだよね」

と私が言うと、

「駅前にある。見て行くか」

と父は言ってから

「虎徹、元気にしているか」

と訊いた。

「相変わらずだよ。鎖から逃げ回っている」

「犬だって自由な方がいいもの。もっともあいつは他の犬に比べると、かなり自由なはずだがな」

「いまごろは精いっぱいお母ちゃんに甘えていると思うよ」

ハチ公の銅像は駅の入口を横に見る位置に置かれており、その前には朝の十時過ぎだというのに、早くももう何人かの男女が人待ち顔に佇んでいた。

「何となく淋しそうに見えるのは、駅の入口にそっぽを向いて置かれているせいかな」

そう言いながら、片耳の垂れた銅像のハチ公に、私はハチのイメージをダブらせていた。待ち合わせの人たちが退屈しのぎに撫でたのでもあろうか、ハチ公の前足の爪先の部分だけが異様に光っていた。私はハチへの鎮魂の意味をこめて、それをそっと撫でてやった。

「天理教のハチはどうしている？」

「もう、多分死んだと思うよ」

昨年の秋の、最後の出会いを、私は父に手短に話した。

「そうか。いい犬だったか……」

父は父で、私とは違ったハチのイメージを銅像に重ね合わせていたのかもしれないかった。

一瞬、しんとした空気が親子の間に流れた。

(つづく)

◇ ◇ 長篇連載 ◇ ◇

伝でん 弘く の 生涯 (十三)

— 大僧正岩井智海伝 —

松まつ 浦うら 行ぎょう 真しん

続・その説法

説法のなかに婦人話をまじえることは、よく用いられる技巧の一つである。いうまでもなく聴衆の関心を説法に惹きつけるためだが、かみいりんのう神居琳応大僧正はしばしばそれを使われたことで、よく知られる方の一人だといふ。まず

それで聴衆を笑わせておいてだんだんと手元のほうへ惹きつけてゆき、いつの間にかぐつと締めて、自家薬籠中のものとしてしまうのである。

神居は宇治の平等院三十七世で、戦後の二十三年には推されて浄土宗管長となった人物だが、それより何より、落語家や講釈師が勉強のために聞きにきたといわれるほど、説法

の名手として高名だった方である。はたして本当に婦人話をされたものか、されたとしてもどの程度のものか、筆者は聞いた経験がないので語りようがないが、しょせんは高僧のなさることだ、恐らくは淡色のものだったろうと思う。

神居について、現在の平等院住職である高橋真了に聞くと、

『当時の布教界にあつては、岩井智海と神居琳應は東西の横綱であつたんですね。神居は私の師匠であるが、東北山形の出身であつて、私の父と神居の父は兄弟なんです。だから二人は俗縁からいうと、従兄弟どうしということになる。』

神居の布教は基礎的な基盤をしつかりと守った上で、独特の音声と内容構成によって多くの信者を惹きつけたのです。

しかしながら本当の布教という観点からすると、岩井大僧正のほうがさらに余計、信者を惹きつける布教術を持っていらっしやつたでしょうね。笑わせたりは少なかったと思う。

一つには人格が反映しますからね、説法には。岩井大僧正のお話はじつにまじめ。その半面ね、愛情というか、大衆への思いやり、そういうものが非常に深かつたですね。

岩井大僧正の場合、布教師として実演上感じたことは、非常に音律が素晴らしかつたことです。音律——つまり語りのフシですね。やはり本当の熱が入ってくると、口述の仕方にも情熱がこもってくる。情熱がこもれば音律も平坦（へいたん）ではなく、おのずからそこに高低の変化、抑揚が深く成熟し、それらの調和がきわめて音楽

的となり、人々の感情に浸透してゆきやすいものになってゆく。

私、岩井大僧正のお話の拝聴は、数はないのですけれども残された遺稿や書籍を拝見しますと、笑わせるなんてところはないが、非常に涙を誘うようなところはある、まじめだったことをなおさら強く感じますね。非常にいい実演をやっていた。話にも話し方にも気品があります。信者が非常に多かったのもうなずけます。

今は関東あたりの布教はすっかり変わりました、学校の講義とあまり変わらんものになっていくでしょう？　つまり“情”をすっぱかして知が先に立っている。しかし本当の伝道というのは、まづ情から入って“知”で納得させ、それが意思に徹底し、そして行動に生きくゆ

く。これが口述伝道の原則だろうと思うんです。そういう意味で、岩井大僧正あたりは、古今希なる大物だったと思うのです』（高橋真了談話）

岩井智海は、微塵も聴衆にたいして迎合することがなかったとは、高橋真了ばかりではなく、多くの人の認めるところだったが、じつさい彼は、説法の最中に聴衆がざわついた、私語が聞こえてきたりすると、それを叱ったり、たしなめたりするくらいは、しばしば見られたところだという。

説法の内容が、まじめそのものであっても聴衆が居眼りをせず、たしなめられても結局は引きずられていったというのは、“演者の気迫”ではなかったかと、梶原重道は分析する。「話の老練さと、ご自身の持っておられる気迫でしよう。そういう場合、よくあり

ますがな、フシをつけて語ってみたり、立て口演している場合なら演壇上を歩いてみたりとか。それによって聴衆の気をそらすわけです。しかしそれはあまり歓迎すべき技巧ではない。それをやらずして聴衆を引きこんでゆくというのは、本人自身が話に乗ってゆくからです。乗っていかなくや、どうなるものでもない。その氣迫に、聴衆もまた引きこまれてゆくのです」というのだ。

岩井智海が威儀と作法にひどく神経をつかったことは先にも少しふれておいたが、これは彼を知るほどの人すべてが語るところでもあった。

その、氣の使い方というものは、多くの参詣者で本堂が埋まる行税法要や五重の勸誠などの席はむろんのこと、日常の勤行の場合でも、ほとんど変わることがなかった。

それはまず、白衣を着るときから始まる。

多くの動作をこなしたからといって、襟元がはだけるようなことがあってはいけなないのだ。いまはS字型になった金具などが売られていて、左右から合わせた襟元をその金具で止めることもできるが、そんなものもない時代は下紐一本で締めくくるわけだから、やはりそれなりの工夫が必要で、なかなか大変であつたろうと思われる。

そして、白袴しろはかまをはく。はき終わると、侍者の方をちらりと見て、侍者がこちらを見ていればそのまま前を二、三度、行ったり来たりする。見ていなければ「おい、見ておれよ」と催促してから、やはり同じように行ったり来たりをしてみせる。そして、

「どうだ、足袋の上縁と袴はかまの裾すその間から、肌が見えたりすることはないか」と聞くのだそうである。

見えなければよし、見えればもう一度、はき直しである。

おそらくこれは、高座を降りる勸誡師の裾がめくれて、いまの言葉でいえばズボン下、昔の言い方なら股引きの類などがあらわになったのでは、いかに素晴らしい説法を聴聞し終わった聴衆といえども、興ざめしてしまう。それと同じことで、歩行の間に「肉」が覗くことをはしらないとする感覚から出たものであろうと思われる。諺にも「百日の説法屁ひとつ」といい、「百年の恋も一時に冷める」というではないか。

岩井が繊細な気遣いをしたのは、袴の裾の高さばかりではなかった。七条のような莊嚴袈裟をまとう時はもちろんのこと、如法衣のごとき日常の袈裟の場合でも、侍者ないし伴僧の前で何回か歩いて見せ、袈裟の身体への添い具合、足さばきの具合などを見届けさせ

るのだった。「どんなところでも、それを必ずやってからでないと、本堂には入りませんでしたね」とは、梶原重道の証言である。

また吉澤堯州によれば、本堂に入ってからでも岩井は、前後につく伴僧に「ちようど三歩半で六尺一間の畳を歩ききるようにせよ」とやかましくしつけていたそうで、それに象徴されるごとく作法についてのきびしさは、格別だったと語っている。

形式が精神を規定するというのは確かに一面の真理であるが、それをとくに重く見て、まず形を構え、構えたことによって心をそこへ誘導してゆくのは禅門の真骨頂で、「威儀即仏法」「作法是宗旨」が金看板となっている。例えば衣の長さにしても、足のくるぶしから三ないし四横指上に裾がくるようにという伝統を頑なに守っており、いやしくも歌舞

伎の舞台に登場する坊さんのような、膝までの衣の下からぞろっと白衣が出ているといった類の「フッシュン」は、まさに破法として退けている。岩井も以上を見るかぎり、その傾向の強い人であったといえよう。

もっとも彼は、時には顔にクリームをぬって、勤行なり説法なりに出てゆくことがあったというのである。まだ学生だった梶原重道は、岩井の機嫌がよかったある日、

「御前さん、そんなものをおぬりになるのですか」

と、いくらか冷やかしの気持もあって、聞いたことがあった。すると、岩井は、

「これは化粧ではないのだ。間違えるなよ。」

人前で法を説くときには、聴衆に悪い感じを与えてはいかんのだ。嫌な顔を見せるのはなおいけない。つねに聴衆の心に莊嚴を保つことが大切なのだ。お前たちも心得ておくとよ

い」

と言ったそうだ。なるほど言われてみればその通りで、これは袴の裾から肌が見えないようにする配慮と同質のものである。聞いて梶原は、すっかり冷やかしの気持が雲散霧消してしまったという。

話が余談になるが、梶原には似たような体験が、もう一つあった。

血圧の高い人に共通してみられるように、岩井はどちらかというと怒りっぽいほうで、周囲の者がへまをしたりすると、顔色を変えて叱ったりすることがあった。

しかしそんな時でも来訪者があると、ころっと表情を変えて、それこそニコニコと円成（えんじょう）そのものといった顔つきにかえて対応する。その見事さに、梶原はいつも感心していたそうだが、このことも、もし例のクリーム一件

で、「人の心には常に莊嚴を保つようにせよ」とさとされていなかったならば、あるいは誤解をしたかもしれないが、「心得ごとだよ」と言われていたので、仏教が人との応接について説く「和顔悦色」の実践だなど、素直に理解することができたと語っている。

「怒りっぽかった」と書いた以上は、その怒りの内容も書いておかねば、十全とはならない。それについては山田智旭がこう語っている。

『感情を露骨に出すようなフシもありましたな。若い時は目の玉が飛び出るほど怒ったことがありましたから。

例えば私が空風呂を焚いたときがそうでした。いくらも焚いていないのに、妙にキナ臭い匂いのする煙りばかりがでてくるんですよ。ヘンだなとは思ったん

だけども、それもそのはずで、湯船に一滴の水も入っていないんだから。火事にならなかったのが見つけもので、それでとうとう風呂を一つダメにしてしまった……。このときは怒られた、怒られた。あんまり物凄かったので、「怖いもんやなあ、うちの師匠は」と、つくづく思ったことを覚えています。

これはまあ怒るのが普通でしょうけど、自分の言ったことを守らなんだなんというような時も、やっぱり飛びきり怒りましたね。

これも例えばね、師匠は歯が悪かった。だから歯については特別うるさかった。それで私にも、「智旭、おまえ晩寝るとき、歯を磨いとるか」——これはしょっちゅう言われました。けれども若いときは、いま差し迫ってどうのこうのという

のではないから、よう忘れますがな。そうしたら怒られた、怒られた。「なぜ約束を守らんか」いうてね。

しかし本来はわりと大らかな人でした。「お前は坊さんなんだからああせにやいかん、こうせにやいかん」などということを言われた記憶は、まったくないですな。思うようにさせてくれたという感じですよ』(山田智旭談話)

岩井が弟子や周囲の人を叱ったというのは、おおむねこのような類のときだった、と考えてよいだろう。

話題をもどそう。

吉澤莞州も岩井が、着ものの着方から如法衣など袈裟のかけ方についてやかましかったと追憶したあと、

『礼拝のときの五体投地^(註2)にしても、規定どおりきちんとやらないと気のすまない方でした。高座に上がるのでも、さつさと上がってしまふのではなく、まず前をさばいたあと、ゆっくりと上がる。上がったあと、前にある説相箱^{せつそうばこ}の袈紗^{けさ}を広げるときも、まず前においてから広げるとかね。その心はいうまでもなく莊嚴の保持ですよ。なんといっても参詣者が百人なれば、二百の目がそこに集中しておるのだから、軽はずみなことをしてはいかんというわけです。

自分でそれを守るだけでなく、そういう厳格なことを、私ら周囲の者にもよく教えていただいた。有り難かったと思います。「威儀が聴衆に与える精神的影響は、非常に大きいぞ」と、いつも口ぐせのように言っておられましたからね。で

すからそれ以来、知恩院の布教師会でも、威儀作法への十分な心くばりということ、夏安居^{げあんご}などを利用して若い布教師に教えてゆくようになったのです。私は知恩院の布教師会長を三回やりましたが、その間、若い布教師を指導してゆくのに、岩井大僧正のそれが、非常に役立ちましたね』(吉澤堯州談話)

岩井の周到な準備は、説法そのものだけでなく、会場についても、また行事全体の演出についても、遺憾なく発揮された。事前に、いな^いな^な住^しら^しき^きゆう^{ゆう}(注6)維那や式衆とともに本堂に入って、ここではこう、あそこではこうと指図して、予行演習をするのである。そして多くの人が、高座の高さ一つについてもゆるがせにできなかったのだったと、語っている。

北山秀子は現在、静岡県焼津市の光心寺

住職夫人だが、かつて韓国がまだ日本領だったころの釜山の知恩寺で、住職だった父・大田秀山の計らいで、小学五年生という幼さで岩井から五重相伝^{ごじゆうさうでん}をうけた人である。岩井は昭和二年六月と十一年七月の二回、知恩寺で五重相伝^{ごじゆうさうでん}を行っているが、北山夫人が受けたのは、すでに浄土門主にして知恩院門跡であった二回目のものであったろう。その年の九月に第一回の高血圧発作に倒れるのだから、先にもあげた「五重授戒結縁寺院及結縁年月日」にみる限りでは、これが五重の最後の結縁となっている。

それはともかく、明日からその相伝会^{さうでんかい}がはじまるという前夜、岩井は例によって宿舎から知恩寺に出向き、予行演習をやったらしい。秀子が本堂をのぞくと、いましも岩井は、一蓮托生をなぞって敷き詰めてある茶色っぽい敷物の上に立ち、大声で怒鳴りながら、ああ

しろこうしろと指図をしていたそうである。

それで彼女は、あんな偉いお坊さんでも、大事な行事を明日にひかえた前夜に、怒られることがあるのだなとびっくりしたことを、今もあざやかに記憶しているのだった。そして、そのときのことを思い返して、

（あれはきつと準備が行き届いていなかったからだ。それで怒られたのだ）

と思うようになったのは、ずっと後年になってからだったと、筆者に語ってくれたことだった。

しかしたとえ準備不行届きでも、式衆の中には、指図を面倒がる人もいたらしい。岩井が大僧正となったのは大本山清浄華院の法主となつてからだが、「大僧正ともあろう人が、あんなことをいちいち指示するものではない」と蔭口をたたく人もいたという。その蔭口は岩井の耳に入ることもあるが、しかし本

人はいつこうにとんじゃくせず、予行演習は止むことがなかった。それは以前に、一度ならず二度までも勸戒師・伝燈師として招かれたことのある寺院であつても、変わることがなかったという。

高橋良和は岩井を、

——さんがいへん三界の大導師として、まことに威風堂々としていた。

と語つたが、それはこれらの周到な配慮の上に成り立っていたのである。

筆者とのインタビューを、

『——どの宗派においても、信者を教化し信仰を深め、そして教線を拡張していったのは説教師ですよ。なるほど学者も大切だ。しかし学者は布教師に正しい宗学・宗乗にかんする見解、今の流行言葉でいえば、それらの情報を提供する人であつて、学者自体が教線を拡張することはない。信者をふやしていつ

たのはつねに大衆と接する布教師ですよ』

という言葉で結んだ病床の高橋良和を、筆者はあらためて追懐するものである。(つづく)

(注1) 法要など正式の場で着用する顯色(カラー)の袈裟。縦の縫ぎ目。つまり条が七本ある七条(以下同じ)のほか九条ないし二十五条があるが、七条がもっとも普及している。

(注2) 身体のかなかの両肘、両膝、頭頂の五つの部分を地につけてする礼拝。仏にたいする恭敬礼の最高の形式とされている。

(注3) 現在の浄土宗では導師机の上におき、法要の順序を記した差定や表白を入れたり、説教のときの草稿や、読み上げて紹介したりする経論や祖師の法語などをに入れておく、漆や金銀で飾った箱。

(注4) 夏期、外出を禁じておこなう座禅や修学に励むことをいう。ほかに冬安居、またかつてインドには雨期に実施する

雨安居などがあった。

(注5) 勤行や法要にあたって、衆僧の威儀の指導や、音声部の句頭役、けんじ 鍵稚部を担当する重要な職名。法式に堪能な上席の僧侶が担当する。

(注6) 法要で声明や礼讃、諸鍵稚などの諸役を司る僧衆。

(注7) 浄土宗の教えを五種にわけて伝授する法会をいい、僧対象のもの、在家信者を対象としたものの二種がある。前者を「五重伝法」または「伝法」といい、後者のものは「化他五重」「在家五重」という。

(注8) 煩惱具足の凡夫が生々流転する迷いの三世界——欲界・色界・無色界をいうが、単に「全世界」という程度の意味に使う場合もある。

訂正 編集部の手違いにより、吉澤堯州師の名を「堯洲」と誤記しました。お詫びして訂正します。

新年賀謹

浄土宗宗務総長

大田 秀三

〒370 高崎市通町九〇 安国寺
慈光ビル(〇二七三)二三一四〇〇〇

埼玉工業大学

松川 文豪

鎮西学園理事長

鎮西高等学校校長
真和中学高等学校校長

上田 祐規

〒862 熊本市九品寺三一―一
電話 三六四―八二七六

東山学園

学園長 石井俊恭
常任理事 山崎宏賢

“ 西出澄弘

上宮学園

小西 祐謙
小林 昭五

〒543 大阪市天王寺区上之宮町三一―六

鎌倉大仏殿 高德院

住職 佐藤 密雄

〒248 鎌倉市長谷四―一二二八
電話 (〇四六七)二二一〇七〇三

法然上人御降誕地廿五霊場第一番
中国三十三観音特別霊場

誕生寺

岡山県久米郡久米南町里方
電話(〇八六七)二八―二二〇二

淑徳高校名誉校長

保元寺住職

里見 達人

〒111 東京都台東区橋場一―四―七

寺内 大吉

大原山 西福寺

鵜飼 隆玄

萩市 常念寺

老隠 古本 超然

華陽院

堀田 良謙
堀田 卓爾

〒420 静岡市鷹匠二―二四―一八

謹賀新年

龍泉寺住職 伊東 康雄 〒107 東京都港区南青山二一八一二五	大本山光明寺執事長 西念寺住職 北邨謙順 〒三〇二 南足立市沼田三一五 電話 〇四六五(七四)〇五八八	回向院住職 本多義敬 〒130 東京都墨田区両国二一八一〇	稲田稔界
おてらはみなさんの相談所 桜と観音さまのお寺 浄心寺 小池政雄	函館称名寺 須藤隆仙 〒040 函館市船見町一八一四	中島真哉 青山梅窓院 〒107 東京都港区南青山二二六一三八	教安寺住職 野呂幸進 〒210 川崎市川崎区小川町六一二 電話(〇四四)二二一四九四六
〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二一三六一一 清岸寺 原口徳正	松庵寺内無為窟主 小川金英 〒025 花巻市双葉町六一四 仏教福祉センターよるひる銀行	正覚寺住職 楠美知行 〒030 青森市本町一一一二二	サンガ真仏教舎本部長 大善寺住職 裏辻賢洲 〒八二一三 福岡県宗像郡福岡町松原区

謹賀新年

法然上人二十五霊場 第二番仏生山法然寺 細井俊明	伝通院住職 吉川哲雄 〒112 東京都文京区小石川三一四―六	圓光寺住職 加藤順底 〒020 盛岡市南大通三一―一四九	北川一有 長寿院 〒111 東京都台東区鳥越二―一三一八
本郷昌清寺 前住職 服部仙順 住職 服部光順 〒113 東京都文京区本郷一―八一三	檀王法林寺 だん王子供の家 信ヶ原良文 京都市左京区川端通三条上ル	浄運寺住職 野口善雄 〒376 桐生市本町六一―三九八	西住院 戸川靈俊 〒606 京都市左京区黒谷町三〇
近龍寺住職 松濤弘道 〒328 栃木市万町二二―四 電話(〇二八二)二二―〇八〇二	芳泉寺 柳楽真純 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三一七―四八	光明寺 白幡憲佑 〒232 横浜市南区久保山	悟真寺 住職 立松 辨成 〒440 豊橋市関屋町二二―二 電話(〇五三二)五二―五五六六

新年賀謹

愚鈍院 中村眞道 〒980 仙台市新寺三―二二―一七	晴雲寺 塚田弘導 〒254 平塚市立野町六―五	浄土宗鎮西流根元地 聖光寺 小林忍戒	九品仏浄真寺 清水順碩 東京都世田谷区奥沢七―四一―三
お骨仏の寺 一心寺 貫首 高口恭行 〒543 大阪市天王寺区逢阪二―八―六九 電話(〇六)七七―一〇四四(代)	浄土宗宗議会議員 斉藤价洲 宗源寺 〒110 東京都台東区東上野五―一―六	大松寺 酒井亮貫 〒108 東京都港区三田四―一―三八	札幌新善光寺住職 太田隆賢 〒064 札幌市中央区南六条西一丁目
終戦後、再度の新本堂が完成しました。 教化の新機軸を考えたいと思っています 光心寺 北山良祐 〒425 焼津市東小川一丁目六―一	正雲寺 〒980 仙台市新寺五―八―三七	雲上寺住職 東海林良雲 〒985 塩釜市南町一一―一	法然上人鑽仰会

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）
とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十六卷 正月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成元年十二月二十五日

印刷

平成二年一月一日

発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒102 振替東京八―八二―一七番

新年賀謹

總本山 知恩院

門主 藤井実應

大本山 増上寺

法主 中村康隆

大本山 金戒光明寺

法主 稻岡覺順

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

大本山 善導寺

法主 藤堂俊章

大本山 光明寺

法主 藤吉慈海

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

〒170

東京都豊島区西巢鴨三二〇―一

大正大学

電話(〇三)九一八―七三二―代表

〒603

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

佛教大学

電話(〇七五)四九一―二二四―代表
通信教育部 四九一―〇二三九

学校法人 大乘淑徳学園

淑徳短期大学

理事長 長谷川良昭

〒114 東京都板橋区前野町五―三―七

京都文教短期大学

学長 大橋 俊 有

〒611 宇治市旗島町八〇